

『覺りの道への階梯小論』第十二回 (2009.7.20)

第三 [F3] [菩提心をおこしたのち、行を実習する仕方] に三節ある。

[G1] [菩提] 心を生じたのち、学修項目について学修する必要がある理由。

[G2] 方便と智慧を別々に学修しても仏陀になることができないと示す。

[G3] 学修項目について学修する順序自体を説明する。

第一 [G1]。以上のように発願心を生じたのち、布施などの学修項目の学修に取り組もうとしないような人については、以前に引用した『弥勒のご行状』の経典 [に説かれていた] ように、[発願心を生じた] メリットは大きいけれども、菩薩の学修項目について修行することを核心にしていなければ、仏陀の覺りを開く可能性はないので、[菩薩の学修すべき] 行を学修すべきである。すなわち、『三昧王経』に・・・とあり、また『修習次第初篇』にも

以上のように発心した菩薩は、自らを律することなくして他者を律することはできないと知って、自分自身、布施などの修行に取り組むのである。修行することなしに菩提を得ることはできない。

と説かれている。

修行についても、[菩薩] 戒を受けてから (受戒)、その [菩薩の] 学修項目を学習するのである。

第二 [G2] [方便と智慧を別々に学修しても仏陀になることができないと示す]。仏陀の覺りを實現するための方便に取り組むということも、間違っていない方便である必要がある。すなわち、間違った道にどれほど努力しても結果が生じることはない。たとえば、乳を搾り出したいと望む人が、角を吸うのと同様である。

間違っていなかったとしても、欠けるところがあったならば、努力しても結果は生じ得ない。すなわち、種と水と土など [のうち] 何か欠けているならば、芽は生じ得ないのと同じである、と『修習次第中篇』に説かれている。

それならば、欠けるところが無く、間違っていない因縁は何か、と問うならば、『毘盧遮那の覺り』 [というタントラ] に、

秘密主よ、一切智者の智慧は、憐れみの心という根から生じるのである。菩提心という因から生じるのである。方便によって完成されるのである。

と言われている。

そのうち、憐れみの心については既に説明した。

菩提心には、世俗の菩提心と勝義の菩提心の二つがあり、方便とは布施などの完成 (六波羅蜜) であると、偉大なる導き手カマラシーラが説明している。

そのような道について、間違った理解をした中国の大乘和尚などは次のように言う。

分別知である限り、悪い分別知ならば言うまでもなく、良い分別知であっても [人を] 輪廻に束縛するものであるので、その結果として輪廻を超えることはできない。それは、金の紐によって縛られて

も、縄の紐によって縛られても〔どちらでも同じことであり〕、あるいは空が白い雲によって覆われても、黒い雲によって覆われても〔違いはなく〕、あるいは白い犬に噛まれても、黒い犬に噛まれても〔いずれにせよ〕苦しみを生じるのと同様である。従って、何も分別しないでいることこそが仏陀の覚りを開く道であり、布施や戒律などは、そのような了義（最終的な意味）を修習することのできない愚かな人のために説かれたものであるので、了義を理解したあとでそれらの行に取り組むのは、王が庶民に墮したのと同じであり、あるいは象を捕まえてから象の足跡を探そうとしているのと同じである。

と主張する。そしてそれについて和尚は、何も分別しないことを賞賛なさっている八十の経典を典拠として引用して証明したのである。

この〔主張〕によって〔中国の和尚は〕方便全ては仏陀〔になるため〕の真正の道ではないと軽視する大きな誤り（損減）を犯しているのである。また勝者（仏陀）の教えの核心である無我について、智慧によって分析的に考察することを否定しているので、勝義のやり方を遠くに捨ててしまったことになる。

これについて、カマラシーラは、誤りのない経典と論理によって正しく退けて、勝者を喜ばず正しいみちを興隆なさったけれども、今でもまだ、〔戒律を〕護ること、制止することなど、行に属するもろもろのものを蔑視して、道を修習するときにそれらを捨てるなど、以前〔の大乘和尚〕のようにしている人がいるし、またある者は、方便の側面を無視すること以外は〔和尚の〕見解の理解の仕方を〔採用し〕、また他の者は、分析的考察の智慧によって真実についての見解を求めることを止め、何も思わない（不思議）という中国の修習の仕方を正しいものと主張しているように思われる。

それは空性を修習することの一部であるとも思えないが、たとえ空性の修習であると認めたとしても、空性の意味を正しく修習する者たちは空性のみを修習すべきであり、行の方面は世俗を対象としているものである〔ので、それ〕らは修習する必要はないというのは、全ての聖言と矛盾し、また論理の道を逸脱しているものに他ならないと思われる。

その理由は次の通りである。すなわち、大乘者たちの実現すべきものは、無住处涅槃であるが、それについて〔「無住处」には二つの意味がある。一つは〕輪廻に住しないということ〔であるが、それ〕は、真実を理解する智慧、勝義に基づく道の階梯、深遠なる道と言われるもの、〔仏陀になるための二つの資糧のうち〕智慧の資糧、智慧の側面と言われるもの、これらによって実現されるものである。〔それに対してもう一つの無住处は〕寂滅たる涅槃に住しないということ〔であるが、それ〕は、存在する限りの全てのものを知る智慧、世俗諦に基づく道の階梯、広大なる道、〔仏陀になるための資糧のうち〕福德の資糧、方便の側面と言われるもの、これらによって実現する必要があるからである。

同様に『秘密不可思議経』に・・・とあり、また『無垢であると讃えられるものによって説かれた経』にもまた・・・とあり、『伽耶山頂経』に・・・とある。

これらの意味を〔アティシャの〕『覚りへの道を照らす灯明』にも、・・・あり、また・・・とはっきりとおっしゃっており、また『宝鬘経』には、・・・とあり、また・・・とある。

もし、布施などの諸行を学修するのに、空性の確固とした理解がなくてはならず、あるならばそれで十分であると思うならば、そうであるならば、〔菩薩の〕初地などを得〔て、空性を理解した〕仏子（菩薩）たちと、特に無分別の智慧を自在に〔使える境地〕を獲得した第八地の仏子には、行は必要ないことになるが、それは正しくない。なぜならば、〔菩薩の〕十地の各々〔の段階〕で、布施など主要な〔行〕はそれぞれ〔別々〕であるが、他の〔諸行〕も行じないわけではない、と『十地経』にお説きになっているからである。すなわち、それぞれの地で六波羅蜜を全部、あるいは十〔波羅蜜〕を全部行じるのであるとおっしゃっ

ており、また、特に第八地の箇所、全ての煩惱が尽きて、全ての概念的意味づけが止んだ勝義に住しているとき、諸々の仏陀は、「空性を理解することだけで覚りを開くことはできない。なぜならば、声聞も独覚も、それを得るからである。私（仏）の身体と智慧と国土など、これら無量のものを見よ。私（仏）の〔十〕力なども汝にはない。それ〔を得る〕ために努力を始めなさい。衆生が寂靜〔に住すること〕なく、煩惱に苦しめられているのを考えなさい。忍耐も捨ててはならない。」などと言って勧めて菩薩行を学修する必要があると説いているならば、他のことは言うまでもないからである。

密教の無上〔ヨーガタントラ〕の高度な道の場合には、これとは異なったものがあるけれども、一般に密教と波羅蜜乘（顕教）の両者において、二つの発菩提心（発願心と発趣心）と、六波羅蜜を学修する道の共通の大まかな内容が等しいことは既に説明した。

もし、布施など〔の六波羅蜜行〕が必要ないと主張しているわけではなく、何も思わない〔不思議〕それに、それら〔六波羅蜜などの行〕が全部備わっている、すなわち、布施される人と、布施する主体と、布施の財とに対して執着しないので、認識対象のない布施が〔不思議の禪定に〕全部備わっているし、同様に他のものも備わっているし、経典にも、〔六波羅蜜の〕各々の中に六つずつが含まれていると説かれているからである、と考えるならば、それだけで全部が備わっていることになるならば、外道の精神統一（止）などにおいても、禪定に入ったときにそのように執着することがないので、波羅蜜全てが備わっていることになるし、特に『十地経』に説かれているように、声聞・独覚にも法性（法の真実）について、無分別の智慧があり、それについて禪定で瞑想しているとき、菩薩行全てが備わっていることになってしまうので、〔声聞・独覚も〕大乘者になってしまうであろう。

〔六波羅蜜〕それぞれの中に六つずつが含まれていると説かれているので、それだけで十分であると主張するならば、曼荼羅供養においても、「牛の糞・尿とともに布施する」などと言って、六〔波羅蜜〕全部があると説かれているので、それだけをするのが理に適っていることになってしまう。

したがって、見解によって支えられた行と、方便によって支えられた智慧とは、たとえば、愛する息子が死んで悲嘆に苦しんでいる母親が、他の人と話そうとするときに、どのような心が生じても、悲嘆の力は〔その心を〕去ることはないが、全ての心が悲嘆の心であるわけではない。それと同様、空性を理解している智慧が強力であるならば、布施をすることや礼拝、廻ること（コルラ）などをするとき、それらを見ている意識は空性を理解している知ではないけれども、その〔空性を理解した智慧の〕力を内に秘めて生じていることは矛盾しないのであり、〔修行の〕セッションの初めなどにおいて、前もって菩提心を強く起こしていたならば、空性の三昧に入ったとき、その菩提心は直接現れてはいないけれども、それによって栄養が与えられていることに矛盾はない。方便と智慧を離れさせないやり方も同様である。

福德の資糧の結果は、輪廻における身体と財産と長寿などであるとお説きになっているものについても誤解してはならない。なぜならば、方便に巧みでないならば、そのような〔結果となる〕が、その〔方便に巧みなこと〕によって支えられるならば、〔福德の資糧は〕解脱と一切智者の因として全く適しているのである。なぜならば、『ラトナーヴァリー』に・・・と説かれている通りであり、〔ほかの〕聖典も無数にある。

さらにまた、あなたは、あるときは、悪い境遇（地獄・餓鬼・畜生）の原因になる悪行や煩惱全ても仏陀〔となる〕原因に変えることができると主張し、あるときは、輪廻における繁栄の原因になる布施や戒律などの諸々の善〔行〕も輪廻の原因であって菩提（覚り）の原因とはなり得ないと言っているように見えるので、心を落ち着けて語りなさい。

また『経』に「布施などの六〔波羅蜜行〕において執着するのは魔の所業」とあり、また『三品経』に・・・と説かれ、また、『梵天所問経』に・・・と説かれていることについて誤解してはならない。すな

わち、最初〔に引用した経〕の意味は、〔人と法の〕二つの実体（人法二我）が存在すると誤った執着をすることで引き起こされた布施などは、不浄なものである（欠陥のあるものである）ので、魔の所業であると説かれているのであって、布施することなどが〔無条件に〕魔の仕業であると説いているわけではない。もしそうでないならば、「対象に墮してから布施をお与え下さい。」というように「対象に墮する」必要はなく、単に布施を与えたことを懺悔しなさい、とおっしゃるのが理に適っているのに、そのようにはおっしゃっていないからである。

『修習次第後篇』に、このような返答の仕方をなさっているのは、非常に重要なポイントである。なぜならば、〔大乘和尚らの立場をとる人たちは、〕この〔経典の意味〕を間違っ理解して、行に関わることは全て、人あるいは法を実体と捉えるものであると考え、実体的な見方であると主張しているからである。

「この物品を与えよう」という与える心と、「この悪行を止めよう」という制止の心と、このような善についての分別一切が〔行為主体・行為の受け手・対象という三者が実体としてあるという〕三元論的な見方をする法我執であるならば、法無我の見解を得たものたちは、怒りと自己慢心など〔が否定されるの〕と同様、〔与える心や制止の心、善についての分別一切を〕あらゆる意味で否定するのが理に適っているけれども、それを目的にして〔法無我を〕得ようとするのは、まったく妥当ではないのである。

「これはこれである」という分別は全て、〔主体、受けて、対象の三者が〕実体として存在すると分別する法我執であると考えれば、師匠の優れた性質や有暇具足に大きな意味があるとなどと考えることや、死を思い起こすことや、悪い境遇の苦しみを考えることや、〔三宝への〕帰依や、「この業からこの結果が生じる」〔という縁起〕や、慈しみの心や、憐れみの心や、菩提心〔を起こすため〕の訓練や、発趣心の学修項目を学修する〔という、これまでに説明してきた全ての〕ことにおいて、「これはこれである」「これからこれが生じる」「これにはこのような優れた性質とデメリットがある」と考えて、確信を引き出す必要があるのみであるので、それに対して確信が強くなればなるほど、法我執も増大していき、また法無我についての確信を強く護れば護るほど、それだけ、これらの道〔の階梯に属する諸項目〕についての確信は小さくなっていくので、行と見解の両側面は、熱さと寒さのように矛盾するものとなってしまう、その両方向についての強力で永続的な確信知を生じる余地が無くなってしまふのである。

それゆえ、〔修行の〕結果（仏果を得る）の段階で法身が得られると設定することと、色身が得られると言うことの二つが矛盾しないのと同様、〔因の段階である〕道の時にも、〔人と法について〕実体視する見方を微塵も残すことないという、概念的思考を離れることにも確信知を引き出すこと、そして「これからこれが生じる」あるいは「これにはこのようなメリット・デメリットがある」というようなことについての確信知を引き出すこと、これら二つが矛盾しないようにする必要がある。

それはまた、基礎になる見解である二諦（世俗諦と勝義諦）を確定する仕方に依存しているので、聖典と論理によって、輪廻から涅槃に至るまでの全ての存在（法）に、それ自体のあり方が微塵もない、あるいは真実なるあり方において自性が微塵も成立しないと確定する勝義〔諦〕を確立する正しい認識と、因果関係にある諸存在が少しも違うことなく、それぞれ決まった因果の関係にあると設定する日常的行為（言説）における正しい認識の二つが、相互に排除する関係に〔ないという〕のは言うまでもなく、一方が一方を支える関係になることに確信を得たならば、そこから二諦の意味を理解し、勝者の真意を得たとされるものの数に入るのである。

・・・